

氏名 成川 岳大



○ 所属

日本学術振興会

埼玉大学 非常勤講師(全学教育)

○ 専門分野

ノルウェーを中心とした、北欧前近代の歴史社会

○ 今日のテーマ

ヴァイキングは夏至を祝ったのか？ 供犠の伝統とキリスト教の祭日

○ 夏至について一言

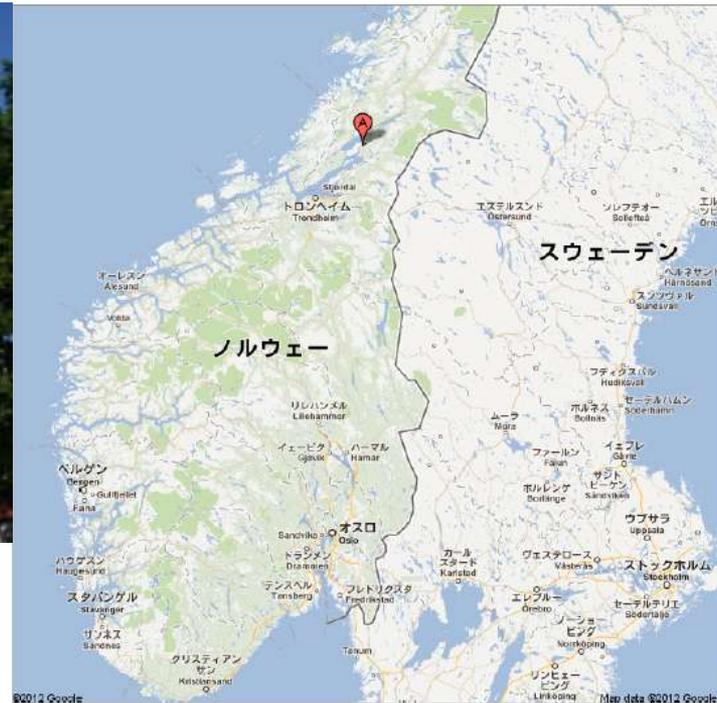
留学中にはわざわざスウェーデンまで夏至祭を見に遊びに行っていて、今日お話をさせていただくノルウェーの田舎での行事の開催を見落としていました。



事件が起きた？舞台：1013年前(AD999)のメーレ (中部ノルウェー、トロンデラーク地方)



現存するメーレ教会(12世紀後半建造)



メーレ(スタインヒェル・コムーネ)



事件当事者と関係事績：



(左) オーラヴ・トリュグヴァソン王(在位
995-1000年)の像(トロンハイム)

(上) 都市トロンハイムと大聖堂



『オーラヴ・トリュグヴァソン(以下OT)のサガ』(スノッリ『ヘイムスクリングラ』) 65-71章



ソール(トール)の聖域に入る王OT(19世紀の画家H. Egidiusの再現画)

- 中北部ノルウェーの農民: 王OTにメーレでの夏至の供儀祭開催要求(65章)
- 前哨戦: 王、5人の首長を捕え人身供儀に捧げようとし、屈服させる(67章)
- 武装した王・従士と残りの首長・農民、両勢力がメーレで対峙(68章)
- 聖域に入り神像を破壊する王／後者の指導者殺害→強制洗礼(69章)



事件(と夏至の供犠祭)の史実性についての疑問

① 長続きしない改宗

- ✓ 『オーラヴ聖王(治世1015年頃-1030年)のサガ』107-109章
:「秋には冬を称える供儀祭を、つぎの供儀は冬至祭、第三の供儀は夏におこなって、夏をむかえるのが彼ら(農民)の習わしなのです」(『オーラヴ聖王のサガ』108章)

② 多神教時代における夏至の「供儀祭」の位置付け

- ✓ この挿話以外、夏至の開催は史料にほとんど出てこない：
例)『オーラヴ聖王のサガ』;夏?夏至祭ではない?
- ✓ メーレの夏至の供犠祭:他の供儀祭と同様の手順(内容)?
指導者「鉄の」スケツギ「王よ、わたしたちは以前他の王たちがここでそうなさったとおりに生け贄を捧げることを望んでいるのです」(『オーラヴ・トリュグヴァソンのサガ』68章)

③ 史料の性格:「サガ」=歴史?物語?



(参考) 後代の史料での冬至の供儀祭の描写 (『ヘイムスクリングラ』中、『ホーコン善王のサガ』14章)

- 「供儀祭が開かれるとき、すべての農民(ボーンディ)は聖域に、宴が催される間自分が飲食する食料を携えて参集することになっていた。宴では、すべての者がエール(ビール)を持ってこなければいけなかった。あらゆる種類の家畜と馬が屠られた。それから流れ出る血はすべて「フラウト(生贄の血)」、血の受け皿となる器は「フラウトのボウル」と呼ばれた。そして(カトリックで)聖水をふりまくはけのようにして、「フラウトテイン(生け贄の枝)」でもって偶像の祭壇と聖域の囲いの壁の内外に等しく真っ赤になるようにフラウトがふりまかれ、人間もとぼちりを食うことがあった。一方、その肉は宴に供するために煮て調理された。聖域の中央の床に火が焚かれ、上に鍋が置かれた。火の周りに酒杯が運ばれ、宴を主宰する指導者は杯と食べ物すべてを「聖別」することになっていた(中略)。以前に埋葬された自分の縁者をしのび人々は杯を傾けたが、それは「追憶の杯」と呼ばれた」

① 動物(+人間)の屠殺、血／肉の調理

② 供儀祭(「宗教」行事)＝宴(社交行事)としての側面

※供儀祭の単純禁止＝人々(+王)の交流の一方的停止



(参考2)「ホーヴ」=聖域？／首長の館？
(×「神殿」=専用の祭祀建築物)



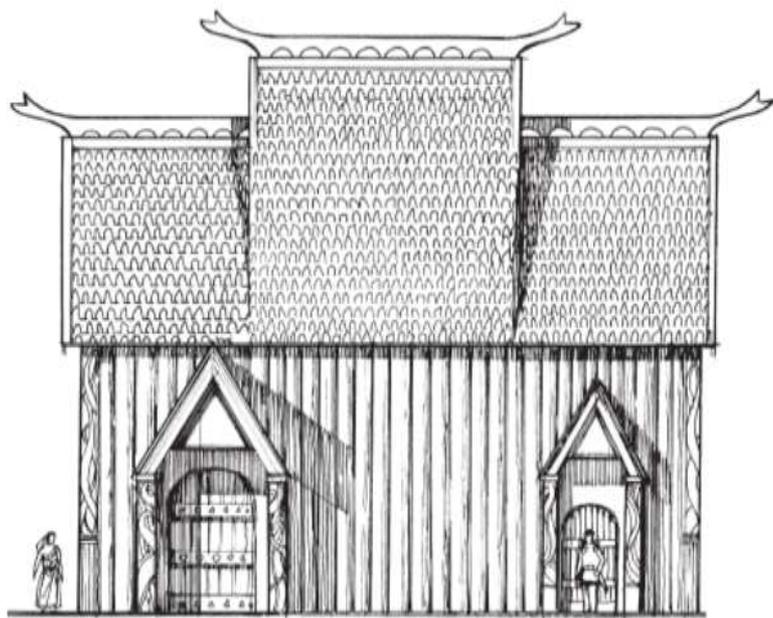
(上)野外にしつらえた「聖域」再現
(フォテヴィク野外博物館／スウェーデン)



(右)首長(有力者)の館の再現建築
(リーベ・ヴァイキング博物館／デンマーク)



(参考3)ウップオークラ(スウェーデン)で発見された「ホーヴ」らしき遺構(右)と再現図(左)



Av eld rödfärgad vägg.

[図版出典]: UAC: Uppåkra arkeologiska Center. *Uppåkra: En Järnåldersstad*. Säsongen 2012, ss. 3f.



多神教時代の(政治-)祭祀中心地メーレ、 及びオーラヴ(OT)との確執をめぐる伝承



「ニダロス(トロンハイム)司教区にメーレという場所があり、悪霊からの神託が下されていたと言われている(中略)。王[オーラヴ・トリュグヴァソン]は妖術師を悪霊に捧げられた建築物に集め、偶像とともに焼き殺すよう命じた」(修道士テオドリクス『ノルウェー古代列王史』11章)(1188年以前執筆)

メーレ教会地下から発掘された黄金板(祭祀用?)

- OT対メーレの確執の伝承、複数系統伝来
- ⇄ どこから「夏至」が出てきたのか?



12世紀後半:メーレ(中北部ノルウェー)の農民は教会により夏至祭開催と宴会を強制されていた?

「すべての農民(ボーンディ)は、洗礼者ヨーン[ヨハネ]の祝日に穀物2メル(約32.4リットル)から醸造したエールで宴を催すべきと定められている。どれだけの人数で集まるかについては大司教が許認可権を持ち、冬至祭の前に宴を行わなかった場合には3エーレを司教に罰金として支払うこと」(『フロスタシング法』「教会関連部門」21条)

- (大) 司教／教会主催の行事としての夏至祭の(再)定義
 - ✓ 夏至＝聖ヨハネの祝日jonsok; jonsvaka
- 供犠祭に代わる社交行事としての「夏至祭」



OTとメーレの夏至の供犠祭＝「キリスト教的「夏至祭」のはじまりの物語」？

- 「彼[オーラヴ・トリュグヴァソン]は自分の農場にまず教会を建造させ、供犠とそれに伴う宴を禁じ、供犠の宴に代わるより良き代替物として、冬至祭と復活祭、聖ヨハネの祝日(夏至)におけるエール、そして聖ミカエルの祝日における秋のエールを民にもたらした」[『ノルウェー諸王の小史』11章(1190年頃)]
 - ① 元々四季に多神教時代の北欧人は宴を催していた？
 - ② 具体的な開催時期、キリスト教側の事情で決定？
- 多神教時代の夏至祭の含意：12/13世紀に書き留められるまでに失われる
 - 夏至祭の特殊な位置付け、キリスト教時代に強化？
 - 夏至祭の意義を説明する挿話として創作された？



2人のオーラヴ、ふたつの供犠祭:「先駆け」オーラヴ・トリュグヴァソンと「真打」オーラヴ聖王



オーラヴ・トリュグヴァソン

- 治世995-1000年
- 夏至の供犠祭inメーレをやめさせる
- (洗礼者ヨハネ)

オーラヴ聖王

- 治世1015年頃-1030年
- 冬至の供儀祭inメーレを滅ぼし、多神教に終止符
- (イエス=キリスト)



ご静聴ありがとうございました

参考史料・文献(抄録)

- スノツリ・ストウルルソン『ヘイムスクリングラー—北欧王朝史(全4巻)』(リブロポート／北欧文化通信社, 2008-10年).
- S. Bagge, “The Making of a Missionary King: The Medieval Accounts of Olaf Tryggvason and the Conversion of Norway.” *JEGP* 105-4 (2006): 473-513.
- Lidén, Hans –E. “Utgravningen i Mære kirke: Hvordan skal funnene tolkes?” I: *Før og etter Stiklestad 1030: Religionsskifte- kulturforhold- politisk makt*, red. Øystein Walberg (Stiklestad, 1994), ss. 59-68.
- Sanmark, Alexandra. *Power and Conversion: A Comparative Study of Christianization in Scandinavia*. Ph. D. Thesis, UCL, 2002; Dep. of Archaeology and Ancient History, Uppsala Univ., 2004.
- UAC: Uppåkra arkeologiska Center. *Uppåkra: En Järnåldersstad*. 2012.
<http://www.uppakra.se/wp-content/themes/uppakra/UAC_2012.pdf> [LA: 2012/06/28]

